九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学の食器類について

吉田，茂二郎
九州大学総合研究博物館

三島，美佐子
九州大学総合研究博物館

岩永，省三
九州大学総合研究博物館

折田，悦郎
九州大学文書館

https://doi.org/10.15017/3077269

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 17, pp.115-125, 2020-06-25. The Kyushu University Museum
バージョン：
権利関係：

九州大学総合研究博物館研究報告第17号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.17, 2020, pp.115-125

九州大学の食器類について

吉田茂二郎[1)]・三島美佐子[1)]・岩永　省三[1)]・折田　悦郎[2)]

[1)]九州大学総合研究博物館
[2)]九州大学文書館

要旨：1935年以降に九州大学内で利用されていた多種類の食器が大学移転時に博物館によって収集された。その総数は308個で、器の形から20種類に分類した。器に書かれたシンボルマークと文字から、製作は一度に行われたものではなく、３～４期であると思われた。聞き取り調査の結果、すべて美濃・瀬戸地域で作られたものであることが判明した。

キーワード：食器、シンボルマーク、美濃・瀬戸地域

はじめに

九州大学（以下、本学）で利用されていた食器、特に移転に伴う発掘調査で出土したものについては、すでに本学埋蔵文化財調査室（2014）と田尻（2013）の記載がある。それらは、本学の前身にあたる組織から総合大学として発足後の期間、1903（M36）～1935（S10）年頃のものであった。今回の報告では、それ以後の食器類（るつぼを含む、以下食器）で、長い間本学内で利用されてきたものについて概説する。これらは、2005（H17）～2018（H30）年に行われた本学の伊都キャンパス移転において箱崎キャンパス内で発見され、本学博物館によって収集されたものである。

食器の種類と総数

収集された食器の種類とその数量は、以下の通りである。

1	急須	3
2	湯呑み茶椀	21
3	灰皿	44
4	コーヒーセット（カップ）	2
5	コーヒーセット（ソーサ）	26
6	ティーセット（カップ）	49
7	ティーセット（ソーサ）	76
8	プレート（丸皿）	4
9	楕円盛皿	8
10	ボール（和食器の可能性大）	9
11	徳利セット（徳利）	1
12	徳利セット（お猪口）	1
13	酒杯	1
14	ケーキ皿	12
15	パン皿	5
16	ベリー皿	26
17	和食器（三角形）	14

その他

1	COOP 皿関係	5
2	工学部食堂皿	1
3	るつぼ	1

今回収集した食器の種類は20（その他３種を含む）であり、総数は308（同７）個で、これらの食器の詳細を付表に示す。その他を除く17種類の食器は、おおむね会議用と簡易立食パーティー（会食会を含む）用であると思われる。どのように使われたかについての正確な情報はないが、農学部事務職員への聞き取り調査から、教授

会や学科会議での利用法や飲み物給仕等について以下のことがわかった。

○　農学部教授会は、１号館６階の大会議室で開催
○　教授会でお茶等の給仕は1995（Ｈ７）年くらいまで続き、山﨑新学部長が1996年に廃止
○　大会議室内での給仕はお茶のみ
○　大会議室前の準備室に希望者のためのコーヒーが用意

学部では、教授会が最も大きな重要な会議であるが、それに続くものとして学科会議があった。学科会義では、教授会での議題等について話し合うことが主であるが、その他に教授陣の会食会や非常勤講師が来た場合の歓迎会昼食会も学科会議室で行われていた。その時には、食後に果物やケーキが準備されていた（昭和50年代）ように筆者は記憶している。そのための食器が各学科に配られていたと思われるが、発見されたのは数例であった。その他、農学部では附属農場で大量の大学食器が発見された。このことから、本学内の附属施設でも同様に利用されていたことがわかる。

購入年代の推定と現存食器の種類

本学の前身から初期の1903（M36）～1935（S10）年頃の食器は田尻（2013）によって、デザインが学部ごとに大きく異なっていたことが報告されている。一方、今回収集された食器では、「九州大學」を丸く図案化したマーク[*1]（以下、ロゴマーク、写真１）と縁線が描かれ、そして食器裏面の高台内（以下、高台）には学部名等が描かれた統一的な形式となっている。理学部では、ロゴマークと高台の学部名の形式から、３時期に分けて製作・購入されたと考えられる。

第１期　高台に緑色文字「理學部」が縦書きのもの（写真２）
第２期　同　　青色文字「理学部」が縦書きのもの（写真３）
第３期　同　　青色文字「理学部」が横書きのもの（写真４）

什器の調査から「學」の文字は帝國大学時代に「九州大學」と記載された備品ラベルが存在することがわかっ

写真１　食器のロゴマーク

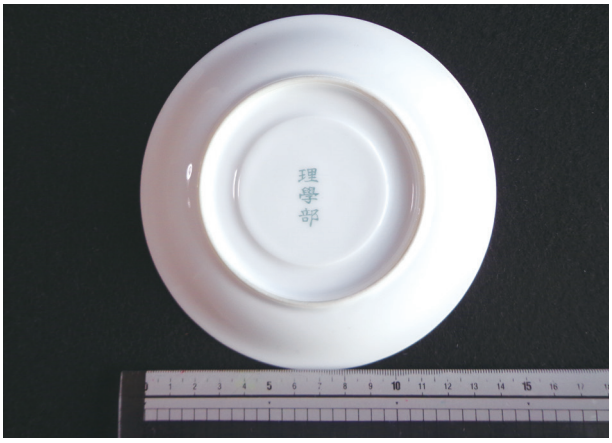

写真２　第１期の高台様式

写真３　第２期の高台様式

写真４　第３期の高台様式

ている。よって第１期のものは、理学部が設置された1939（S14）年から戦後の1949（S24）年に新制大学になるまでの間に購入されたものと思われる。なお、これらの食器が製作された場所は、佐賀県九州陶磁文化館と岐阜県立現代陶芸美術館の両学芸員により、九州の有田ではなく美濃・瀬戸地方であると判定された。

食器の種類としては、以下のものが見つかっている。

1　灰皿
2　急須と湯呑み茶椀
3　ティーカップ＆ソーサー
4　和食器取り皿（三角形）
5　プレート（丸皿）
6　ボール（和食器の可能性大）
7　盛り皿（楕円形）

農学部の食器の場合、購入された年代は理学部同様に幾つか確認できるが、理学部ほど明確ではない。一方で、色々な種類の食器が残っているのが農学部食器の特徴である。これまで見つかった食器のほとんどは、白磁で縁に金彩が施された洋食器の形式であるが、専門家の鑑定から、農学部の食器には和食器と考えられる形にもかかわらず縁に金彩が施された洋食器風のものの存在が明らかとなっている。食器の種類は、以下の通りである。なお、農学部の食器についても理学部同様、美濃・瀬戸地方の製作であると判定されている。

1　灰皿
2　湯呑み茶椀Ａ、　同Ｂ（鍋島焼３人唐子）
3　ティーカップ＆ソーサー
4　コーヒーカップ＆ソーサー
5　ケーキ皿
6　パン皿
7　ベリー皿（果物用）
8　和食器取り皿（三角形）
9　ボール（和食器の可能性大）
10　徳利セット（徳利、お猪口）
11　るつぼ

以上の理学部と農学部以外では、法学部と工学部から数点が見つかっているのみである。

1　法学部　ベリー皿、ボール
2　工学部　工学部食堂楕円皿
3　COOP 皿（楕円、丸）

高台に学部名のあるもの以外に、高台や側面に「九大」、「九州大学」があるもの、ロゴマークや縁線が緑色のもの、ロゴマークではなく松の校章が描かれたもの、高台に所属の記載がないもの、同商社名があるもの等が見つかっている。今回これらは、大学本部（以下、本部）で利用されたものとして分類した。なお、種類としては以下の通りで、それらを写真５～17に示す。

1　灰皿　（写真５）
2　湯呑み茶椀と急須　（写真６、７）
3　ティーカップ＆ソーサー　（写真８）
4　コーヒーカップ＆ソーサー　（写真９）
5　ケーキ皿　（写真10）
6　パン皿　（写真11）
7　ベリー皿（果物用）　（写真12）
8　和食器取り皿（三角形）　（写真13）
9　プレート（丸皿）　（写真14）
10　ボール（和食器の可能性大）　（写真15）
11　徳利セット（徳利、お猪口）　（写真16）
12　盛り皿（楕円形）　（写真17）

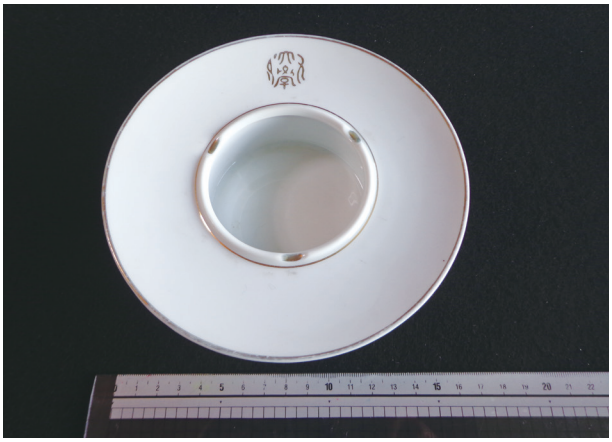

写真５　灰皿

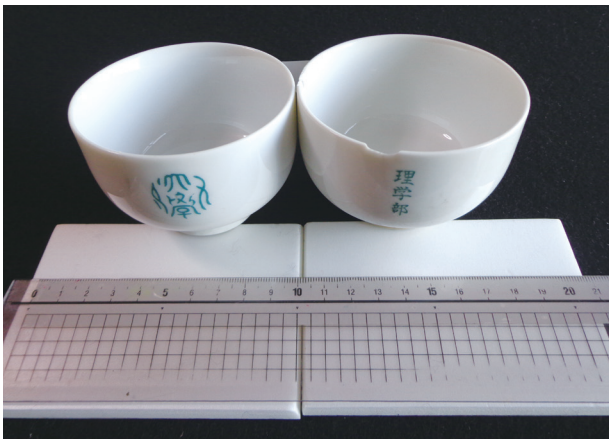

写真６　湯呑み茶碗

写真７　急須

写真８　ティーカップ＆ソーサー

写真９　コーヒーカップ＆ソーサー

写真10　ケーキ皿

写真11　パン皿

写真12　ベリー皿（果物用）

写真13　和食器取り皿（三角形）

写真14　プレート（丸皿）

写真15　ボール

写真16　徳利セット（徳利、お猪口）

写真17　盛り皿（楕円形）

食器の購入年代について

理学部では、第１期～３期が考えられたが、全部の食器を概観すると以下の第Ⅰ～Ⅳ期を想定することができると考えている。

本学第Ⅰ期（食器デザイン黎明期；1930（S5）～1935（S10）年以降）

ロゴマーク・縁線が緑色、高台に商社名、校章

本学第Ⅱ期（理第１期；S24年頃まで）

ロゴマーク（金色）、学部名（「學」を使用し、緑色縦書き）

本学第Ⅲ期（理第２期；S24年以降）

ロゴマーク（金色）、学部名（「学」を使用し、青色縦書き）

本学第Ⅳ期（理第３期；不明）

ロゴマーク（金色）、学部名（「学」を使用し、青色横書き）

おわりに

本学の食器について概説した。これらから、学内の歴史とともに学内での活動状況も垣間見ることができた。食器は九州有田ではなく、瀬戸・美濃地方で製作されたものということであったが、九州と唯一つながるものが見つかっている。それは、農学部由来の小型るつぼ（写真18）である。器の外側面に「CP KORAN」の刻印とマークがあり、現在の香蘭社が製作したものであろう。大学では食器とともに、多くの実験器具が利用されており、それには九州有田産のものも多く使われていたであろうが、器具の発展とともに交換消失したものと思われる。これらは、有田の焼き物の歴史と照合することによって、別の交流が判明するであろう。

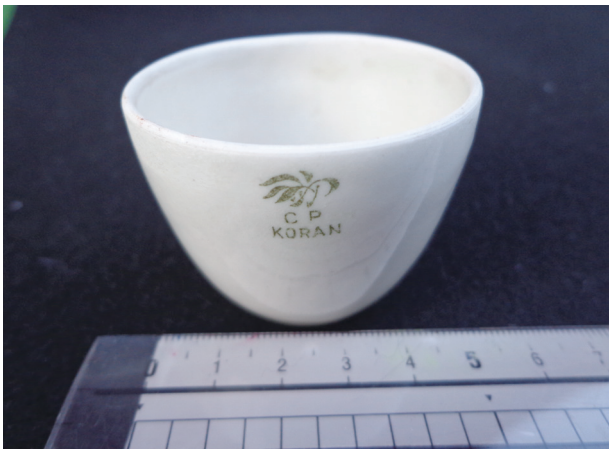

写真18　有田香蘭社製と思われる小型のるつぼ

謝辞

本学の食器の鑑定、特に産地の特定については、佐賀県立九州陶磁文化館（家田淳一学芸課長）、岐阜県立現代陶芸美術館（立花昭・山口敦子学芸員）、多治見市美濃焼ミュージアム（山本智子学芸員、渡部誠一所長）、瑞浪地区業者山功製陶所社長、窯業研究所の多くの方々にご協力いただきました。特に、柴山氏（元佐賀県庁）には、最初に聞き取り調査を行う機会を与えていただきましたこと、ここに記して心より御礼を申し上げます。

参考文献

九州大学埋蔵文化財調査室（2014）うつわと九大．福岡ミュージアムウィーク2014参加企画特別展示（九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館３階常設展示室）．九州大学総合研究博物館ニュース22，1-2.

田尻義了（2013）九州大学出土の硬質陶器について．平成25年度九州史学会発表レジメ．

折田悦郎（2013）創立記念日、シンボルマーク、誘致・設置運動．九大広報［百周年特集号］，39-44.

参考資料

＊１：今回取集された多くの食器に使われている「九州大學」を丸く図案化したロゴマークは、折田（2013）によれば、学位記用の図案として1920（大正９）年に東京美術学校に依頼し作製された菊花紋章の中央に配されていたもの（写真19）であり、宮内庁に関連のある非常に重要な紋章の一部である。しかしこの利用は、今回の食器研究が始まるまで認識されていなかった。

写真19　学位記の菊花紋章

聞き取り資料① ── 九大食器について ──

九州陶磁文化館　学芸課長　家田淳一氏

2016年１月19日　13：00～15：00

訪問者：柴山氏（佐賀県庁）、吉田

九大食器の産地等について

・九大の食器は、硬質土器（磁器の一種）である。

・上薬がない部分の土の透明度が高いことから、有田ではなく瀬戸・美濃産であろう。

・ティーセットの箱に印刷してあったKIKUSUIの名には、聞き覚えがある。

・一方、Yamako Chinaはわからないが、「山」がついた名称は、美濃では一般的である。

歴史的な背景等

・大正頃には美濃での生産が有田を抜き、洋食器のシステム生産が行われ大量注文が受注可となっていた。

・日清あるいは日露戦争時の戦争時の杯（軍用？）は、美濃製が多かった（美濃と有田の両方の視察では、どちらも手榴弾、水筒、非常食入れ、湯たんぽ等の製品まで展示がされていた）。

・食器にマークを入れる技法は、明治20年代に始まり、初期は銅板、その後ゴム印になっていった。九大のものは、典型的なゴム印によるマークつけである（有田歴史館の展示に中には、歴史的には、手書きの後にコンニャクを利用した方法もあったようだ）。

・食器の歴史は、如何に品質のそろったものを生産するかであり、競争力は製品の均一性の向上そのものである。よって、変形、傷等があるものは徹底的に排除された。

九大の食器

・九大の食器は、特別注文等ではない、普通のオーダーメイドであろう（美濃、有田の聞き取りから、大量生産品に間違いないが、品質的には粗悪品ではなく、それなりのグレードのものとの評価）。

焼き物の製作について

・本体は、始めに1300度で焼く、その後、マークや学部名を入れて、再度約700度で焼き付ける。

・取手のついたカップは、焼成時の変形を防ぐために伏せて窯に入れることが多いが、それによってカップ上縁に上薬がつかない部分が出てくる。そこで、それを隠す目的で、カップ上縁に金彩を施すが、結局それがカップのデザインとなるために、ソーサーも同様の金彩を施している。

・電気ロクロによる製作（特に、皿類については、型に粘土を押し当てて、広げていく方法が取られている。鋳込みは、形が複雑なものに利用される。九大食器は、カップと皿であり、ロクロ成形であろう）。

・一方で、急須は全体的な形等から鋳込みである（ロクロ（電気）にはない、不連続な面がある）。

・現代の食器は、ノリタケのように有名なところについては、カタログや資料が残っているので詳細がわかっているが、それ以外はわかっていない。

食器の種類について（ノリタケにて）

・食器は、製造会社によって定義が多少異なっており、洋食器の標準がこれだとの判断は製造元に聞かないとわからないが、ノリタケの場合、洋食器にはどのようなものであれ段差あるいは不連続面があり、それによれば、パン皿、ケーキ皿、コーヒーあるいはティーカップは洋食器で間違いないし、ベリー皿も概ね正しいであろう。しかし、その他のものは、和食器か中華といった評価も可能である。

・三角皿は、ロクロ成形をした上で、周辺を取り除いたものである。

・ケーキ・パン皿は、美濃焼きの瑞浪地区での製造のように思われる（土岐市山功高木製陶所社長の評価）。

・金彩マークの摩耗・劣化によって、銀彩に見える場合がある。

・マークは、おそらく転写ではなくゴム印を利用したものではないか。しかし、当時にそのような技術はあったものの、今ほどの技術はなかったはずとの考えもある（有田資料館での展示で、図柄描写にコンニャク利用の事実があったこともわかった）。

九大歴史の時代考証

・現物の詳細な観察より、農学部の食器では、①裏書き無し、②裏書きに、取り扱い商社マーク「M」＋ yamako china（made in JAPAN が転写されていない）、③同、「農学部」縦書きの３期が認められた。

・理学部のティーカップ等の詳細な観察より、①裏書きなし、②裏書きとして「理學部」縦書き、③同「理学部」縦書き、④同「理学部」横書きの４期が認められた。

・これまでの什器用の備品番号ラベルから、「學」は帝国大学時代の表記であり、戦前のものと思われる。縦か

ら横への表記法の変化はわからない。社会習慣によるものか。

その他

・学内での利用の形態を当時の方々から収集する必要がある。

聞き取り資料②── 九大食器の種類・区分について

2016年１月４日　17：00～17：30

ＪＲ博多阪急店７Ｆ洋食器売り場（wedgwood にて）

①丸中深皿（径190mm ×高さ35mm）：和食器ではないか、洋食器スープ皿ならもっと径が大きく深い、煮物などを盛る同タイプの和食器が存在

②丸小浅皿（径150mm ×高さ20mm）：和食器の取り皿、同タイプのものが存在

③三角小浅皿（径150mm ×高さ20mm）：和食器の取り皿、同タイプのものが存在

④丸小平皿（径160mm ×高さ15mm）：洋食器の典型的なパン皿

⑤丸中平皿（径195mm ×高さ17mm）：洋食器の典型的なケーキ皿

⑥丸小深皿（径150mm ×高さ28mm）：洋食器の典型的なベリー皿

⑦大型オーバル皿：（長径312mm ×短径220～240×高さ31mm）：洋食器の典型的な盛り皿

⑧大型オーバル皿（Ｙ字３仕切り）：（長径312mm ×短径225mm ×高さ31mm）：洋食器の典型的な盛り皿

聞き取り資料③－九大食器に関する聞き取り調査

訪問日：2016年３月１日～２日

訪問先：多治見市美濃焼ミュージアム（山本智子学芸員、渡部誠一所長）
岐阜県立現代陶芸美術館（立花昭・山口敦子学芸員）、瑞浪地区業者　山功製陶所、窯業研究所

訪問者：吉田　茂二郎

３月１日　多治見市美濃焼ミュージアムを訪問し、九大食器に関しての歴史、製造工程等について、山本智子学芸員と渡部誠一所長の意見を伺い、他の情報を得る目的で、岐阜県立現代陶芸美術館と地域の業者（山功製陶所）を紹介された。よってその美術館を訪れ、立花昭・山口敦子学芸員から九大食器に関する幾つかの見解を収集した。

その後、実際の製造業者である土岐市定林寺地区の山功製陶所を訪問し、技術的な面からの見解を聞き取った。そこで、九大食器の一部は、瑞浪地区の生産ではないかとの評価で、瑞浪地区の瑞浪工業組合と窯業研究所を訪れることを勧められ、後者を訪問した。これまでの情報を全て披露し、再度技術的な面を中心に鑑定を行ったが、大量生産品であることからこれまで以上の詳細はわからなかった。

聞き取り資料④── 九大食器に関する聞き取り調査

訪問日：2016年３月３日～４日

訪問先：佐賀県陶磁器工業協同組合（百武専務）、有田焼窯元　株式会社「華山」（佐藤営業部長）
伊万里市洋食器メーカー「ノリタケ」、佐賀県立陶磁文化館（家田学芸員）

訪問者：吉田　茂二郎

３月３日　佐賀県陶磁器工業協同組合（百武専務）を表敬訪問。製造元として紹介頂いた有田焼窯元（株）華山を訪問し、九大食器の区分、特に洋食器と和食器について佐藤営業部長に判定をお願いした。その結果、不明な点があったので、伊万里市の洋食器メーカー「ノリタケ」をご紹介頂いたので、直ちに同社を訪問し、洋食器販売元としての食器区分の判断をお願いした。

３月４日　波佐見町「陶芸の館」を訪問し、波佐見焼と有田焼の違いを学習し、その後佐賀県立陶磁文化館（家田学芸員）を訪問し、九大食器の歴史等についてこれまでの調査内容を報告するとともに、結果について協議した。その後、家田学芸員から推薦された有田陶器美術館と同市歴史民族資料館を訪問し、食器製造の歴史等について学習し、九大食器のマークが印刷であること等の歴史を確認した。

聞き取り資料⑤── 九大食器の種類・区分について

2019年７月16日　11：00～11：30

訪問者：吉田　茂二郎

ＪＲ博多阪急店７Ｆ食器売り場（wedgwood __坂本販売員、深川製磁__中島・太田販売員）

・ボール（丸中深皿、径190mm ×高さ35mm）：洋食器にも製造元によって色々な形のものがあり和食器と断定することは難しい。一般的にはボールと呼んでいる。

同日　福岡岩田屋新館７階食器売り場（深川製磁＿佐野販売員）

・ボールという名称だが、農学部由来のものは、理学部のものに比べて浅く側面が急な形状をしており、限りなく和食器に近いものであるとの鑑定であった。

聞き取り資料⑥ ── 九州大学医学部医学歴史館

2020年１月27日　11：30～12：30

訪問者：吉田　茂二郎

訪問場所：九州大学医学部医学歴史館

館内展示に、昭和10年頃の学生食堂の写真があり、テーブルの上には今回のロゴマークの付いた湯呑みと思われるものが置かれていた。今回、工学部食堂皿や COOP 皿が見つかっていることから、学生食堂で今回のロゴ入り食器が使われていたのではなかと思われた。

Received January 17, 2020; accepted March 10, 2020

付表　食器類のサイズ等の詳細

番号	品名	数量	上径等（cm）	高台径等（cm）	高さ（cm）	胴径（cm）	由来部局	表面マーク	裏面（学部名等）	備考
A-11	灰皿	1	16.5	9.5	4.9		農 _A6	食器印 _ 金	無し	
B-11	灰皿	1	16.5	9.5	4.5			食器印 _ 金	脚部に九大＿金	
D-11	灰皿	2	16.3	9.3	4.6		本部	食器印 _ 金	無し	
D-11	灰皿	1	16.5	9.4	4.9		本部	食器印 _ 金	九大＿横緑	側面に印
D-11	灰皿	1	16.5	9.4	4.9		本部	食器印 _ 金	九州大学＿横緑	側面に印
D-11	灰皿	32	16.5	9.5	4.9		本部	食器印 _ 金	九大＿横金	側面に印
SⅢ-11	灰皿	2	16.5	9.5	4.5		理	食器印 _ 金	理学部＿縦	
SⅣ-11	灰皿	2	16.5	9.5	4.5		理	食器印 _ 金	理学部＿横	
AL-23	灰皿	1	16.0	9.3	5.0		本部	食器印 _ 金	農学部＿縦	
AS-15	灰皿	1	16.4	9.4	5.0		本部	食器印 _ 金	農学部＿横	側面
B-14	急須＿ A	1	8.0	8.0	13.0	14.0		食器印 _ 金（蓋1胴1）	無し	取手上部に金丸
SⅢ-17	急須＿ A	1	8.0	8.0	13.0	14.0	理	食器印 _ 金	理学部＿縦	
B-15	急須＿ B	1	8.0	4.1	13.0	14.0		食器印 _ 金（蓋1胴2）	無し	蓋縁と取手に金彩
A-16	湯呑み茶椀（A）破片	1							無し	外側に緑２重細線
A-14	湯呑み茶椀＿ A	1	8.4	3.8	5.8		農 _A6	校章 _ 緑	無し	外側に緑２重太線
A-15	湯呑み茶椀＿ B	1	8.0	4.1	4.6			食器印 _ 緑	無し	
B-13	湯呑み茶椀＿ B	7	8.0	4.1	4.6			食器印 _ 緑	無し	
AL-16	湯呑み茶椀＿ C	6	8.0	4.1	5.4		農	食器印 _ 金	無し	
AL-16	湯呑み茶椀＿ D	4	8.0	4.1	5.4		農	食器印 _ 金	無し	
SⅡ-13	湯呑み茶椀	1	8.2	4.2	5.4		理	食器印 _ 緑	理学部＿縦緑	ⅡⅢ期
A-12	ティーセット（カップ）	4	9.8	4.4	4.9		理	食器印 _ 金	無し	理から
B-12	ティーセット（カップ）	1	9.5	4.5	5.0			食器印 _ 金	無し	二つに割れている
SⅢ-12A	ティーセット（カップ）	6	9.5	4.4	4.9		理	食器印 _ 金	理学部＿縦	KIKUSUI 箱＿ 1
SⅢ-12B	ティーセット（カップ）	4	7.5	6.0	6.5		理	食器印 _ 金	理学部＿縦	
SⅣ-12	ティーセット（カップ）	3	9.5	4.4	4.9		理	食器印 _ 金	理学部＿横	KIKUSUI 箱＿ 3
SⅣ-13	ティーセット（カップ）	6	9.5	4.4	4.9		理	食器印 _ 金	理学部＿横	KIKUSUI 箱＿ 2
SⅣ-15	ティーセット（カップ）	20	9.5	4.4	4.9		理	食器印 _ 金	理学部＿横	
AL-11	ティーセット（カップ）	1	9.6	4.4	5.0		農 _A6	食器印 _ 金	農学部＿縦	
AL-13	ティーセット（カップ）	1	9.6	4.4	5.0		農	食器印 _ 金	農学部＿縦	
AL-15	ティーセット（カップ）	3	9.6	4.4	5.0		農 _ 赤④	食器印 _ 金	農学部＿縦	
A-21	ティーセット（ソーサ）	1	14.5	8.5	1.8		印刷所	食器印 _ 金	yamako china	裏面は商社名
C-15	ティーセット（ソーサ）	6	14.2	8.7	1.9			食器印 _ 金	無し	
SⅡ-11	ティーセット（ソーサ）	3	14.2	8.4	2.3		理	食器印 _ 金	理学部＿縦緑	Ⅱ期
SⅢ-13A	ティーセット（ソーサ）	9	15.0	8.8	2.1		理	食器印 _ 金	理学部＿縦	KIKUSUI 箱＿ 1
SⅢ-13B	ティーセット（ソーサ）	25	14.5	8.5	1.8		理	食器印 _ 金	理学部＿縦	
SⅣ-12	ティーセット（ソーサ）	6	14.9	8.8	2.1		理	食器印 _ 金	理学部＿横	KIKUSUI 箱＿ 3
SⅣ-13	ティーセット（ソーサ）	6	14.9	8.8	2.1		理	食器印 _ 金	理学部＿横	KIKUSUI 箱＿ 2
SⅣ-14	ティーセット（ソーサ）	18	14.9	8.8	2.1		理	食器印 _ 金	理学部＿横	

番号	品名	数量	上径等（cm）	高台径等（cm）	高さ（cm）	胴径（cm）	由来部局	表面マーク	裏面（学部名等）	備考
AL-11	ティーセット（ソーサ）	1	14.8	8.8	2.2		農 _A6	食器印 _ 金	農学部__縦	
AL-13	ティーセット（ソーサ）	1	14.8	8.8	2.2		農	食器印 _ 金	農学部__縦	
AL-18	コーヒーセット	1	7.0	6.0	6.5		農 _A6	食器印 _ 金	農学部__縦	
A-19	コーヒーセット（カップ）	1	7.5	6.0	6.5		印刷所	無し	無し	取っ手あり
A-19	コーヒーセット（ソーサ）	1	15.7	9.7	1.9		印刷所	無し	九大__縦	九大は金色 ; 丸形浅め小皿
A-22	コーヒーセット（ソーサ）	1	15.7	9.7	1.9		農	食器印 _ 金	無し	丸形浅め小皿（青４）
AL-19	コーヒーセット（ソーサ）	5	15.7	9.2	2.2		農	食器印 _ 金	農学部__縦	縁に金線
AL-19	コーヒーセット（ソーサ）	6	15.5	9.2	2.3		農	食器印 _ 金	農学部__縦	縁に金線
AL-19	コーヒーセット（ソーサ）	12	15.5	9.2	2.2		農	食器印 _ 金	農学部__縦	縁に金線
A-24	ケーキ皿	3	15.8	9.7	1.4		印刷所	無し : 縁線に緑	無し	中央窪み ; 歪みあり ; 丸形小皿
A-24	ケーキ皿	7	15.8	9.7	1.5		農	無し : 縁線に緑	無し	中央窪み ; 歪みあり ; 丸形小皿
AS-13	ケーキ皿	2	19.6	11.7	2.2		農 _ 青①	食器印 _ 金	yamako china	裏面は商社名、縁に金線
C-12B	パン皿	2	16.7	9.7	1.6			食器印 _ 金	無し	
C12-A	パン皿	2	16.1	9.3	1.8			食器印 _ 金	yamako china	中心に食器印、裏面は商社名
AS-14	パン皿	1	16.2	9.2	1.8		農 _ 赤○	食器印 _ 金	yamako china	裏面は商社名、縁に金線
A-23A	ベリー皿	7	14.1	8.3	3.0		?	無し	法学部__縦緑	
A-23B	ベリー皿	3	14.7	8.3	2.9		農	食器印 _ 金	無し	丸形浅め小皿（白２）
C-11B	ベリー皿	2	14.7	8.3	2.9			食器印 _ 金	無し	
C-11A	ベリー皿	2	13.8	8.3	2.9			食器印 _ 金	yamako china	中心に食器印、裏面は商社名
AL-22	ベリー皿	3	14.7	8.3	2.9		農 _A1	食器印 _ 金	農学部__縦	
AL-22	ベリー皿	9	14.7	8.3	2.9		農	食器印 _ 金	農学部__縦	白①２枚
SⅢ-15	和食器取り皿（三角形）	2	縦 _15.8	9.8	2.0		理	食器印 _ 金	理学部__縦	
AS-11	和食器取り皿（三角形）	12	縦 _15.8	9.8	2.0		農 _ 銀⑤、理	食器印 _ 金	無し	縁に金線
SⅡ-12	プレート（丸皿）	4	23.2	18.3	2.3		理	食器印 _ 緑	理学部__縦緑	ⅡⅢ期
AS-12	ボールA（和食器煮物用）	1	19.3	11.3	3.5		農 _ 青③	食器印 _ 金	無し	縁に金線
SⅢ-18	ボールB（丸深皿）	8	20.0	18.3	3.5		理	食器印 _ 金	理学部__縦	
A-29	酒杯	1	7.6	2.8	3.0			無し	無し	歪みあり
A-17	徳利セット（お猪口）	1	5.5	3.0	3.1		農 _A6	食器印 _ 金	無し	
A-17	徳利セット（徳利）	1	2.7	4.7	12.3	5.5	農 _A6	食器印 _ 金	農学部__縦	
C-13	楕円盛皿	1	長 _31.2	短 _22.7	3.1			食器印 _ 金	無し	
C-14	楕円盛皿	2	長 _31.3	短 _22.5	3.1			食器印 _ 金	無し	Y字の区分けあり、厚手
SⅢ-14	楕円盛皿	5	長 _31.2	短 _24.0	3.1		理	食器印 _ 金	理学部__縦	
A-30	るつぼ	1	5.3	2.4	4.1		農	会社マーク、CP	無し	香蘭社製と思われる
A-27	COOP 皿	1	20.6	11.2	3.7			coop、kyusyu univ	菱形の中に MINO	
B-16	COOP 楕円皿__ A	1	長 _26.0	短 _18.2	2.9			coop、kyusyu univ	菱形の中に MINO	青線__利用頻度大
B-17	COOP 楕円皿__ B	1	長 _26.0	短 _18.7	2.7			coop、kyusyu univ	菱形の中に MINO	青線__利用頻度中
B-18	COOP 楕円皿__ C	1	長 _26.5	短 _19.5	2.4			coop、kyusyu univ	菱形の中に MINO	青線__利用頻度小
B-19	COOP 楕円皿__ D	1	長 _29.5	短 _21.2	3.0			coop、kyusyu univ	菱形の中に MINO	青線__利用頻度大
B-20	工学部食堂楕円皿	1	長 _31.8	短径 _23.1	3.4			九大工学部食堂 _	無し	文字__エンジ、縁線__金

The tableware found at Kyushu University campus

Shigejiro YOSHIDA[1)], Misako MISHIMA[1)], Shozo IWANAGA[1)], Etsuro ORITA[2)]

[1)] The Kyushu University Museum
[2)] Kyushu University Archives

Since around 1935, many types of tableware were utilized in Kyushu University. These were collected during the relocation of Kyushu University from Hakozaki campus to Ito campus. The number of tableware collected are 308 pieces and they are classified into 20 types according to its shapes. These tableware were produced in 3 or 4 times not once by the observation of symbol mark and words written on the tableware. And the interview survey revealed that the tableware have been produced in Mino-Seto area of Nagoya prefecture.

Key Word: tableware, symbol mark, Mino-Seto area

九州大学総合研究博物館研究報告　投稿規定

本研究報告は九州大学の研究資料ならびに九州大学総合研究博物館の研究内容に関する論文を掲載する査読付き雑誌である．本博物館の関係者（教員，各種研究員，ボランティア，教員の指導学生）が投稿できるが，九州大学の研究資料に関係する内容であれば，その限りではない．

不定期刊とし，ある程度の数の原稿が集まった段階で印刷する．投稿の前に編集担当者と出版の日程を十分に相談する．

投稿料は基本的に無料とする．ただし，15ページを超えるか，多数のカラーページを掲載する場合には，印刷費の一部を投稿者が負担することがある．

著者校正は原則として初校のみとする．校正時の内容の変更や追加は認めない．もし，やむを得ない事情により変更・追加する場合は，それにともない発生する費用を投稿者が負担することがある．

別刷は50部単位で作成し，当館負担とする．それ以上は投稿者の負担とする．

電子版別刷（PDF ファイル）は当館負担で作成する．PDF 別刷の挿図のみカラーを希望する場合は連絡事項に記すこと．

原稿は十分に推敲され，適切な校閲を既に受けたものとする．投稿された原稿は，原則として２名の校閲者によって査読される．

投稿原稿の採否は，査読者の意見に基づき，編集担当が決定する．編集担当は原稿の内容について訂正，再検討を求めることがある．重大な修正が要求されない場合は，変更箇所などについて，事前に著者に通知を行わない．

原稿作成要領

原則的に電子メールによる投稿原稿（ファイル添付）を受け付ける．原稿は A4サイズの横書きとし，A4判用紙を用い，上下左右各 3 cm 以上の余白をあけ，基本的な体裁（引用文献の表記を含む）に関しては，最新の号を参照し，Microsoft Word で作成する．

原稿１ページ目の上部には，少なくとも 1/4ページ以上の余白をあけ，ランニングタイトル，別刷冊数を記入する．清書する活字の大きさフォントサイズは14ポイント（和文12ポイント）とし，句読点には「. , ; : ・」を用いる（和文では全角）．なお，欧文では，表題や見出しを含めて，いかなる場合にも大文字だけで表記しない．

特殊なレイアウトを必要とする場合，ファイル中でフォントの大きさや行間等を指定する．

論文原稿は，表題，著者名，所属機関とその所在地（または住所），要約（Abstract），本文，および文献の順に配列する．著者が２人名以上である場合は，著者名と所属機関およびその所在地（または住所）はそれぞれまとめて記す．

和文論文の場合，最後に欧文のタイトル，著者名，要約をつける．欧文論文の場合，最後に和文のタイトル，著者名，要約をつける．それぞれの欧文は著者の責任で専門業者か話者による校閲を受けてから提出する．

写真や原画などの挿図は印刷希望の寸法を指定し，JPG か TIFF ファイルで提出する（350 dpi 以上）．Word ファイルのなかに図を入れ込まないこと．多数の小さな図がある場合，編集の煩雑さを避けるため，個別に本文中に入れ込むことはしない．画像編集ソフトで１枚～数枚のプレートにまとめ，各図に番号をふり，キャプションをつけて提出する．キャプションは本文の Word ファイル中の最後にまとめておく．

テーブルは Microsoft Excel で作成し，別のファイルで提出する。そのキャプションは本文の Word ファイル中の最後にまとめておく．

生物の新種記載や学名の変更に関わる論文は欧文とし，各種命名規約を遵守する．

投稿の際，参考までに信頼できる査読者を２～３名指定する．

原稿の送付先は当博物館教員へお問い合わせのこと（現在は丸山宗利が担当）．